

十津川村・中利助日記抄

若林喜三郎

はじめに

かつて、この文書の所蔵者上坊博喜氏に協力して、『十津川村田泉文書』を刊行したが、時間と紙数の関係上、かなり遺漏が生じたので、他日補遺編を作るつもりであった。しかし、その目的も達しえないままに時を過してきたが、今般いささか小暇を得たので、もっとも気がかりとなっていた、中利助の日記を紹介しておきたいと考えた。

田泉^{たづみ}というのは、十津川村字出谷^{でた}の旧家、中家の家号である。この家が明治二十二年の大洪水のために北海道へ移住したので、中家から他家へと養子に出ていた森之祐が中家に戻ったが、明治四十五年三月に死去、長男利助がその跡を継いだのであった。

この利助が太平洋戦争中から敗戦後にかけての日記四冊

を残しており、当時の村民生活の一端を語る好史料となっているのである。

利助はかなり文才があり、中家の創始以来の歴史を調べた「田泉先祖取調記」なども、その著であるといわれた。その日記は、『乱れ箱』『塵箱』『生活雑記』などと名付けられているが、もともと生産の記録であるから、四冊を通じて農林業・養蚕・牧牛、その他椎茸・株呂皮・松脂などの収穫も委しく記録されているが、元来深い奥山の、僅かな空地を利用したのであるから、洪水・旱魃などの災害も、こまかしくその次第を書き残している。

しかし、昭和初期ということになれば、戦争という人間の起した大災害が中心課題となるのは当然であろう。

一、「乱れ箱」(第一号)

昭和十七年四月から、同十八年十月までの日記で、この第一頁は、四月十六日の平石山への植林からはじまっている。平石というのは、村内で最有力の地主であるから、その持山を借りて植林するのは、この付近の常態であった。

しかし、昭和期では初期から戦争模様で、日本は対中国侵略戦争を拡大し、その結果昭和十六年には、ついに英米との全面戦争に踏みこむことになったのである。それで、四月十七日の記事では早くも中支戦線での戦死者辻某の遺骨を迎え、二十日には出谷国民学校で村葬が挙行されたことが記されている。そして村内各地での戦死者、およびその村葬の報もその後おいおい増加してきた。

さらに、四月十八日には東京・横浜・神戸などの各地に米機の爆撃の報を記し、大陸から太平洋の諸島へと戦線が拡大され、この内陸の山村も、直接空襲をうけることはなくとも、世界的規模の戦場の一端となったことが知らされている。

それとともに、銃後のつとめも強化され、工場等への勤

勞奉仕も追々と加わったと思われるが、七月二十二日には女子青年学校生徒三十三名の和歌山市の紀の川工場への奉仕が約一カ月で、これには利助の五女ミルエの参加も特筆してある。また昭和十八年四月十五日には大日本婦人会の軍事訓練も重里国民学校で実施されていた。婦人達も戦闘訓練に狩り出されるようになったのである。

さらに戦時中の経済的奉仕として記録された貯蓄債券が追々とその種類も増えてきた。それとともに火鉢・ヤカン・クズ鉄など金属類の回収運動で、昭和十七年五月一日には、中利助もその協力に対して奈良県知事の感謝状を受けている。

最後は、昭和十八年四月二十九日の頁に何の説明もなく次の一行が書加えられているのが注目された。

興安東省 札蘭屯 十津川開拓団中主計

これはいうまでもなく、この当時満州十津川開拓団に参加した人で、岡建助氏の『満州十津川開拓団誌』にその名がみえる(三二頁、一〇六頁)。この満州開拓団に関しては後に述べたい。

二、「塵箱」

昭和二十年一月一日より同二十一年四月までの日記で、利助の年頭の初見は次の如くである。

戦争ノ年ヲ送りテ、戦争ノ年ヲ爰ニ迎エテ、国民ハ如何ナル感ヲナスヤ。

「どこまで続く、ぬかるみぞ」と歌われたようなお先真暗闇のたよりなさがにじみ出ている。おまけに、利助の場合には、その前日に産まれたばかりの女兒が一日に死し、いよいよ暗い新年であったと思われる。

重要地点への敵機の来襲は日々激しく、村民の応召と戦死者の報は相次いで、敗戦の兆明らかな内に小磯内閣の総辞職と、鈴木貫太郎海軍大将への大命降下と、その閣僚全員の氏名を利助はその日記に列記している。おそらく、敗戦処理内閣の新聞記事を写したのであろう。

やがて、昭和二十年八月記として、新形爆弾（原爆）の出現とソ連軍の参戦の結果もたらされた日本敗戦の由来を述べ、その末尾に「久シキ苦痛ノ継続ハ爰ニ終止スルニ至ル」と利助は書いている。永いうんざりするような戦争か

らの解放であるから、至極もつともな感想であるが、さし当り大きな消耗戦争の後であるから、国民は洩れなく物資の不足と物価の高さに苦しまねばならなかった。

昭和二十年十二月、利助は次のように驚きを述べている。
終戦後、物価ハ極度ニ暴騰セリ。米価ハ暗相場一升五六十円、椎茸百目二十五円、柿一個三十銭、甘藷一貫五円、牛牝牛子一頭五、六百元、親牛牝数千元。

しかし、三月十五日には注目すべきニュースが記されている。この日学校で学芸会が行われたが、その後六時から男女青年主催の演芸会が催された。「観覧者満員、極メテ盛会ナリ」とあるが、男女青年の演芸会など戦時中は思ひもよらぬ事であった筈で、村民一同、「平和の味を噛みしめた」ことであろう。

二十一年一月一日、利助は商議員に選出された旨通知をうけたのでおおいに驚き、その任に非ずとしきりに辞退したが聴き入れられず、止むなく承諾している。商議員とは、大字から一人ずつ、人望の高い人物が議員として選出されたもので、利助の家に来たのは「平和のたより」ともいふべきではなかったか。

三、「生活雜記」

昭和二十一年四月より同二十三年一月までの日記で、四月二十九日、利助の四女伊豆江と中時市との結婚式の記事が始まる。新郎、新婦は、四国高松の時市の新居に落ちついたが、その住所はその後転々と変り、すべては港町で、豊島丸と付記してあるので、船乗であったのであろう。

折しも終戦後一カ年、このあたりでもっとも重要な問題は、満州の十津川開拓団が口舌には尽し難い悲惨な労苦の末に多数の死者を生じながら、ようやく帰国してきたことである。前述の中主計も幸いにして十月十七日に帰国している。

そして、十津川開拓団引揚者のために、村は援護金を、二度にわたって徴集しており、中利助も金六五円を醸出してゐる。

やがて、十二月に至り、利助は本帳の末尾に次のような感慨を述べている。

終戦三年ノ星霜ハ過ルモ、世ノ混沌ハ何等沈静ヲ覚エズ。

敗戦直後の日本人にいやおうなしに押しつけられてきた「民主主義の嵐」に、不安と期待の毎日を送っていたものと思われる。

四、「乱れ箱」(第二号)

他の日記は、普通の用紙を綴じ合せてあるのに、この日記は、大学ノートを使用しながら、『乱れ箱』という表題を再度使っている。内容は昭和二十九年四月から、同三十二年の三月二十八日までとなっている。

前述のように日々の生産の手控であるから、その内容には特別な変化はないが、老齡のせいか幾分感慨めいたものが多くなっている。

たとえば、この帳面の端に短歌が書込まれてあり、利助の作かどうかは不明であるが、地域と季節感がよく出ていると思う。但し、字が消えているので二首だけを掲げておく。

ふりかへり遠き夢を思ふかな

坂道登る児童をながめて

九十九折る坂道登る児童の姿

朝な夕なにながめる老の目

喜々とした子供の姿がとらえられているのは、如何にも子沢山の利助らしい感慨であろう。

学校の運動会や学芸会の記事もさかんに報ぜられており、十二月十日には婦人会主催で明治初年からの戦没者の慰霊祭が行われ、西南の役に弊れた叔父ちかはるの中英青の英霊も、之に加えることができたの特筆している。

利助の子供は、長男秋緒のほかは七人全員女兒であった。そのうち、四女伊豆枝が船乗に嫁して村外に居住したことは前述したが、最後の七女ひとみも奈良市内に移っている。

他の六人の消息は利助の日記にもほとんど出ないが、この二人は気がかりになるとみえて、日記にも時折その消息があらわれる。

昭和二十九年十月、ひとみと小山手の上坊成三との縁談が成立、同三十年一月二十八日結婚式が挙行された。やがて新夫婦は奈良市田原春日野町に移り、同年十月二十九日には、長男誕生、これが当主博喜氏である。

その後も父娘の間にしばしば文通があるが、同三十二年秋「ひとみが病氣との報」におびえている記事があるが、結局、これは他人の噂に過ぎなかったようである。

司馬遼太郎氏の『街道をゆく・12・十津川街道』によると、土地のタクシーの運転手はこの村の谷垣やがき内に電灯がついたのは昭和二十四年であり、この村の文明開化はそれから始まったと語る。そして、「その頃村の老人は電燈を吹いて消しとった」という「はなし」を聞かせている（二六二頁）。

中利助の日記は、他の分を紛失したのかも知れないが、昭和三十二年の記事をもって終っている。そして、この数年の間に、十津川村は、ダムを中心とする総合開発地区となり、新時代に入ったのである。

利助の日記には、この大事業の記事は出て来ないが、同三十二年三月に、利助の孫陽一ひがひの中学校卒業を機に、静岡県の知人方へ、「農事見習いのために」派遣したことを特記している。

戦時中に慣用された、勤労奉仕などではなく、新時代の生活に即応する実力を身につけるためであったと考えられるのではないか。

中利助翁は、昭和四十七年十一月二十三日、八十六才をもって逝去された。